

## I 研究主題

---

# 表現力の向上を目指した学習指導の研究 ～言語力を高める指導の実践を通して～

## II 主題設定の理由

---

### 1 社会の要請・教育的課題から

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代である。このような社会の変化の中であって、学校教育において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になっている。学力に関しては、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等、③学習意欲が重要な要素として示された。

また、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査など各種調査から、我が国の児童・生徒の課題として、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題がある」と挙がっている。このような状況を踏まえ、新学習指導要領の改訂の経緯の中には、思考力・判断力・表現力を育むために、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると示された。さらに、国語科をはじめとし、各教科等において言語活動の充実を図った指導が求められている。

### 2 地域の実態から

高原町は、県西の霧島山麓に位置し豊かな自然に恵まれ、神楽や棒踊りなど伝統文化がしっかりと受け継がれている地域である。町内には、小学校4校、中学校2校があり、高原中学校区と後川内中学校区の地域ごとに小中連携を図っている。小中連携では、確かな学力と個性の伸長を図ることを目指し、「知・徳・体」の共通実践事項の取組を行ったり、授業研究会や合同研修会を行ったりしながら連携を深めている。今後は中学校区での連携を充実させながら、町内全体の児童・生徒の基礎学力の向上を図ることが求められている。

これらのことを踏まえ、前年度、本研究所では「表現力の向上を目指した学習指導の研究」を研究主題に、児童・生徒の「話す・聞く」力の向上を目指し、「スピーチワークシート集」の作成と活用、指導内容の系統性の把握と授業の工夫・改善などに重点を置き研究を進めてきた。昨年度の研究からスピーチワークシート集の活用で表現力の向上をある程度図ることができたが、スピーチワークシート集を活用するために「書く活動」の指導をさらに工夫する必要があるという課題が挙がった。

そこで、本年度は、昨年度に引き続き「表現力の向上を目指した学習指導の研究」を研究主題に掲げた。本研究所では言語力を「読む力、書く力、考える力、伝える力」と定義し、言語力の向上を図ることが、表現力の向上につながると考えた。また、言語力の向上には、文章の論理構成を理解し、筋道の通った文章表現をするという言語の学びが必要になるため、接続語に注目することにした。このように、接続語に注目して適切に接続語を使うことができるよう、言語力の向上に重点を置いた指導の工夫を図ることで、児童・生徒の表現力を向上させることができると考え、本主題を設定した。

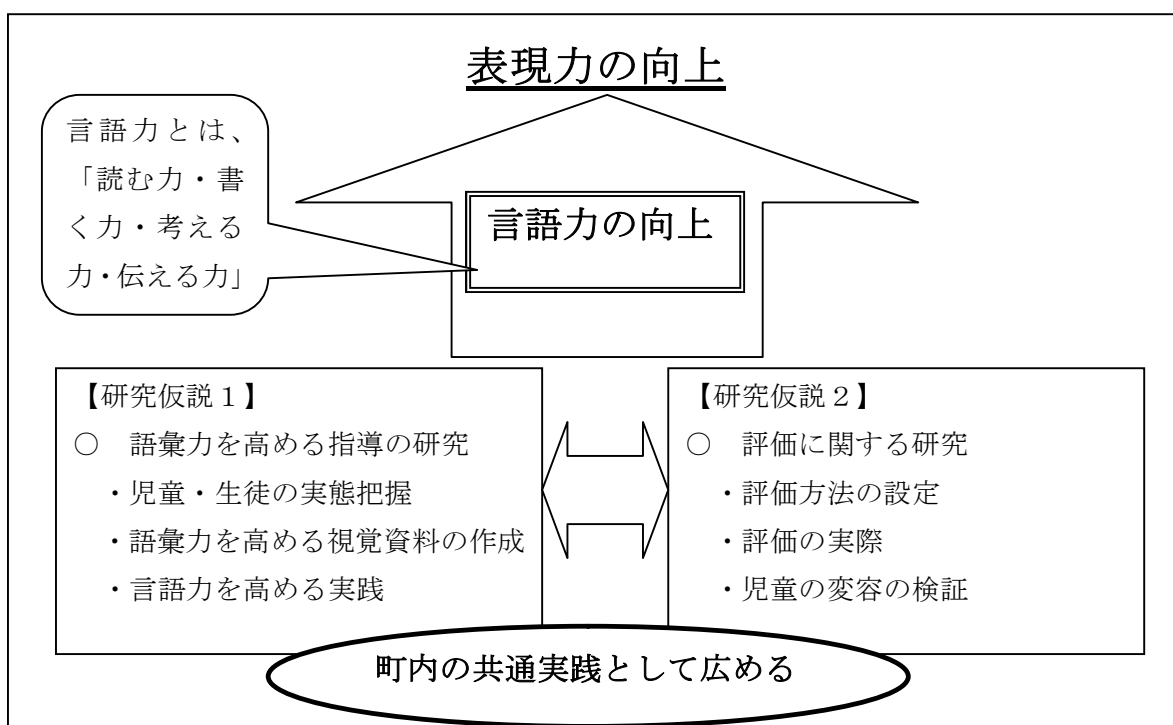
### III 研究目標

言語力を高める指導や評価の充実を図り、その指導について共通実践・検証したことを広め、高原町内の児童・生徒の表現力を向上させる。

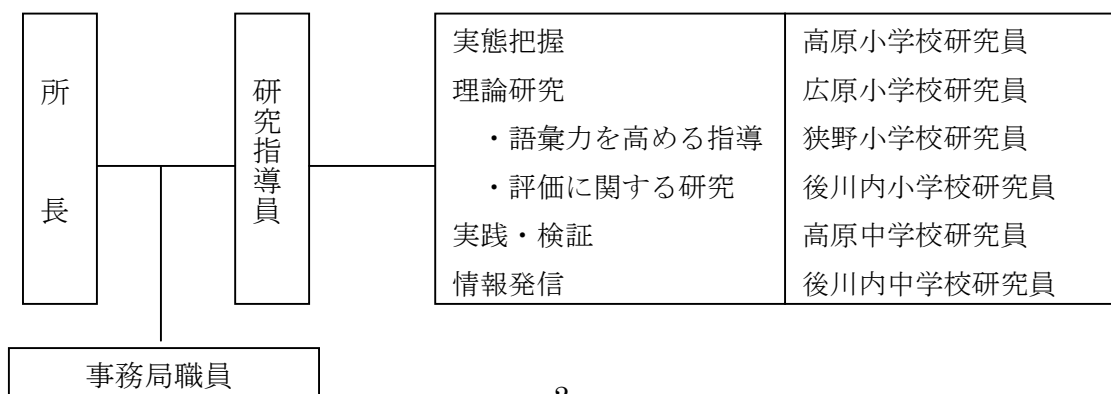
### IV 研究仮説

- 1 各教科・領域を通して、発表や文章表現の際に活用する語彙力を高めるために、語彙力を高める資料の作成を行い、資料の活用を図った実践を工夫すれば、児童・生徒の表現への自信が高まり表現力が確実に身に付くであろう。
- 2 文章表現において、指導者の評価と接続語などの作文を評価する基礎的な観点に注目した評価を比較し、その関連をもとに評価方法の工夫改善を行い、児童・生徒の表現力の実態を明確にとらえ指導に生かせば、児童・生徒の文章表現の関心・意欲が高まり、表現力を高めることができるであろう。

### V 研究構想



### VI 研究組織



## VII 研究内容

### 1 言語力を高め、表現力の向上を図る指導の研究

#### (1) 児童の実態調査

研究を始める前に、各小・中学校（小学校4年生、6年生、中学校1年生）を対象に、意識調査を行った。調査は、表現力に関するアンケートとテーマ作文の2種類の方法で行った。

##### ア 実態把握の方法について

アンケートは、以下の内容について4・3・2・1の4段階の自己評価をした。

- 自分の考えをまとめること（書いたり、話したり）が好きですか。
- 「いつ、どこで、何を、どうした」（5W1H）に気をつけて話をしていますか。
- 「しかし、そして、では、また」など（接続語）に気をつけて話をしていますか。
- 「○○が、△△した。」（主語・述語）に気をつけて話をしていますか。
- 「たとえば○○○です。」など、たとえ（事例）をあげて話をしていますか。
- 「なぜならば、○○○」など、わけ（根拠）を示して話をしていますか。
- 自分の考えや感想を付け加えて話をしていますか。

また、テーマ作文では、「自分の良いところ」を400字にまとめたものを、教師の方で、A～D（Aが高い評価）の4段階で評価した。

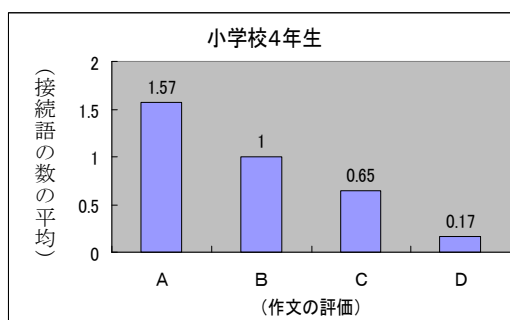
##### イ 考察

右のグラフは、テーマ作文で児童・生徒が使用した接続語の数の平均と作文の評価との関係を表したものである。（縦軸は作文で使用した接続語の数の平均を、横軸は作文の評価を表している。）

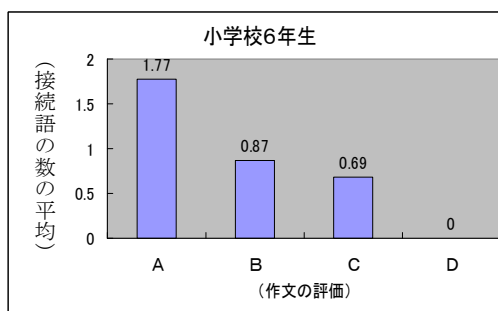
小学校4年生や6年生については、作文の評価が高いAやBの児童になるほど、作文で接続語を多く活用していることが分かった。

一方、中学校1年生については、評価が高いAの生徒では小学生と同様の傾向があるが、あまり評価が高くないCの生徒ではBの生徒よりも接続語を多く活用していることが分かった。

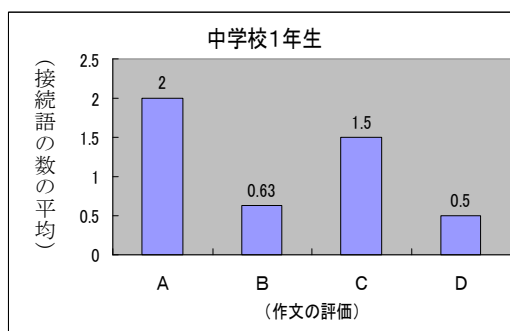
このように、作文の評価が高い児童・生徒は、接続語の使い方が上手であり、適切な場所で正しい接続語を活用して、表現することができると考えられる。また、中学校1年生のCの生徒については、接続語は知っているも、適切な場所での活用が不十分であることが考えられる。文と文をつなぐ接続語は、表現するための基礎の第一歩である。相手に分かりやすく伝えるために、様々な接続語の使い方を知り、それを適切な場所で活用することによって、文章の論理構成が明確になり、筋道の通った表現が可能になると考えられる。



【 小学校4年生の結果 】



【 小学校6年生の結果 】



【 中学校1年生の結果 】

## (2) 「使えるつなぎ言葉ポケット集」の作成

### ア 作成に至った経緯

表現力をたかめるためには、どのような力が必要なのか。「じぶん表現力」のホームページに次の7つの力が必要であると記述されている。

度胸力…恐れずに言いたいことが言える力	語彙力…表現を豊かにする力
論理力…筋道を立ててまとめる力	説得力…話し合いに必要なスキル
理解力…理解しながら聞く力	プレゼン力…相手にアピールする表現力
応答力…話に反応し、働きかける力	

言語力の高い児童・生徒は、つなぎ言葉（接続語）を適切に使うことができていることから考えて、これらの力の中で「語彙力」が最も大切ではないかと考えた。言葉を多く知っていることは、表現力の基本であると考えからである。その語彙の中でも「論理力」「理解力」にも特に必要となる接続語（つなぎ言葉）に焦点を当てることにした。

いろいろな接続語を知り、それを適切に使う力が向上することによって、文章の論理構成が明確になり、筋道の通った表現ができるようになると思う。つまり、接続語を意識して読み・話し・書くことで、表現力も向上するのではないかと考える。

児童・生徒の言語力を高めるためには語彙（接続語）を適切に使えるような手立てをとってはどうかと考え、語彙集を作成することにした。また、町内の小学校3年生以上の児童・生徒に配付し、各学校で国語等の時間を中心に活用を図ってもらうことにした。

### イ 接続語の洗い出し

まず、小学校1年生から6年生までの国語の教科書（東京書籍）に出てくる接続語を、全単元から洗い出す作業をして、接続語の種類と出てくる頻度を調べてみた。

次に、いろいろな接続語の特徴についてインターネットや文献などから資料を収集して、どのような分類項目があるか調べた。以下は、その資料の一部である。

#### —資料1—

##### <四種十類>

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1 論理の接続                 | 3 理解の接続              |
| ①順接…「だから」系、「それなら」系      | ①換言…「つまり」系、「むしろ」系    |
| ②逆接…「しかし」系、「ところが」系      | ②例示…「たとえば」系、「とくに」系   |
| 2 整理の接続                 | ③補足…「なぜなら」系、「ただし」系   |
| ①並列…「そして」系、「それに」系、「かつ」系 | 4 展開の接続語             |
| ②対比…「一方」系、「または」系        | ①転換…「さて」系、「では」系      |
| ③列挙…「第一に」系、「最初に」系、「まず」系 | ②結論…「このように」系、「とにかく」系 |

#### —資料2—

- |            |             |         |         |
|------------|-------------|---------|---------|
| 1 理由と結果を示す | 5 展開する      | 9 解説する  | 13 並列接続 |
| 2 まとめ      | 6 逆接        | 10 関連事項 | 14 選択する |
| 3 結果       | 7 付け加える     | 11 言い換え | 15 順序   |
| 4 条件       | 8 拡充（補足）を表す | 12 話題転換 |         |

これらを参考に、次の10種類の分類項目を設定して、多くある接続語の中でも、特に活用させたい接続語を精選して作成することにした。

番号	種類	活用させたい接続語例
1	理由を表す(とき)	なぜかというとそのわけは というのも それで ~から ~ので
2	まとめ・結果を表す(とき)	だから つまり このように こうして
3	話を広げる(とき)	すると では そこで 実は
4	付け加えを表す(とき)	さらに そして ほかにも それから また しかも そのうえ
5	例を表す(とき)	例えば もし(も) まるで~のようです
6	反対を表す(とき)	しかし だが けれども ところが 逆に これに対して
7	話(話題)をかえる(とき)	ところで さて では 一方
8	同じ内容を並べる(とき)	〇〇たり、△△たり それとも あるいは および
9	順序を表す(とき)	はじめに(まず) 次に 最後に 〇つあります。 1つ目は… 2つ目は…
10	意見を強く表す(とき)	それでも しかも それどころか にもかかわらず

#### ウ 語彙集作成のポイント

作成に当たっては、次のことに留意して行った。

- 1 種類を表す見出しは、児童・生徒に分かりやすい言葉で書いた。
- 2 ただ接続語を集めるだけでなく、国語辞典のように「言葉の例」、「用途(どのように使うか)」、「使う時の注意点やポイント」、「例文」といった項目に統一してまとめた。
- 3 間違いの例や正しい使い方の例を載せた。
- 4 例文はできるだけ短く、児童・生徒の日常生活に照らし合わせた内容にした。
- 5 線の種類を使い分けて表示することで、1つの文が何を表すのか見やすくした。

以下が実際のページの一例である。

### (3) 語彙力を高める指導法の工夫

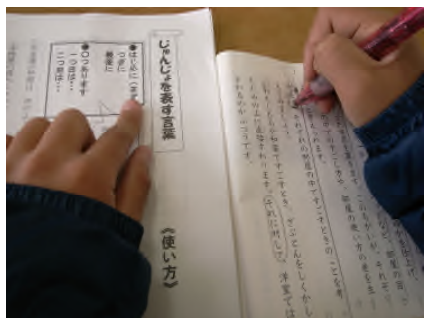
#### ア 授業での活用

授業では「言葉を取り上げた小単元での指導」と「説明的文章教材の学習の中での指導」の二つの場面で、語彙集を使いながら接続語の指導を行った。

「言葉を取り上げた小単元での指導」では、教科書の中にある小単元「言葉の広場」を学習する際の資料として、語彙集をいっしょに指導することで、児童の接続語への理解を深めることができた。



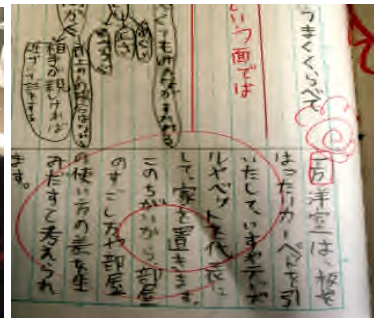
【小単元での指導】



【読み取る場面での活用】



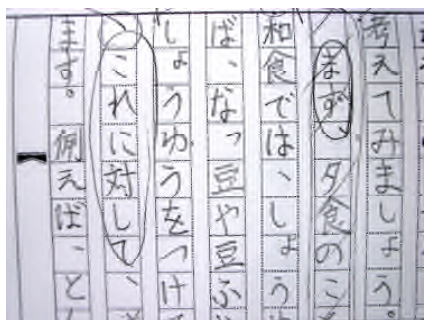
【話し合いの場面での活用】



【まとめの場面での活用】

第4学年「くらしの中の世界について話し合おう（単元名：くらしの中の和と洋）」で語彙の習得を意識した指導を行った。

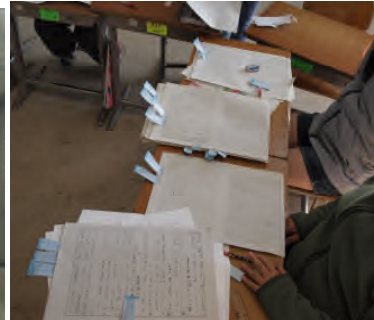
「読み取る場面」「話し合う場面」「まとめの場面」では、児童に一人調べさせたとき、資料として語彙集を活用した。活用することで「順序を表す言葉」を用いるよさ、「例えば」を用いることで筆者の主張が明確に伝わるよさ、「これに対して」を用いることでうまく対比しながら、論が展開できるというよさ等「語彙を用いるよさ」を理解することができた。



【活用した文章作り】



【友達の文章から、よさを見つける場面での活用】



「文章作り」「友達の文章からよさを見つける場面」では、語彙集を手がかりとすることで、接続語に着目しながら文章を組み立てたり、自分の力で友達の文章を読み取ったりした。語彙集を用いることは、文の論理構成を考える際の手がかりとなり有効であった。



イ 日常指導での活用

**理由を表す言葉**

☆ なぜかという  
● そのわけは  
☆ というのも  
● それで  
● ーから  
● ーので

なぜかという  
そのわけは  
というのも

を使うときは、最後に「ーから、ーので」をつけましょう。

この言葉の仲間、次のような時に使います。  
①「ーから後が理由ですよ」ということを知らせる時

『なぜかという』  
このおもちや足りないからで

『そのわけは』  
この問題は全が足りなかった

『というのも』  
今日はおぶろでしまつたから

『それで』  
テストで100点は取れなかった。そのわけは、勉強を怠惰を怠った人だから。それで、1時間聞かせ、今日は、泣かへません。このうのも、足をケガして

この言葉の仲間、次のような時に使います。  
①「ーから後が理由ですよ」ということを知らせる時

けいけん大という仕事をもちがいます。  
そのわけは、大は豊稗がいいからで。  
しょう来は調理士になりたいです。  
という料理を作るのが好きだか

【 単文作り 】

日常的に、語彙集を用いながら単文作りに取り組んだ。「今日はこの言葉に取り組んでみよう」と使う接続語を指定して指導することで、日常的に進んで使っていこうという意欲につながり、多くの言葉を知り、使うよさを学ぶことができた。

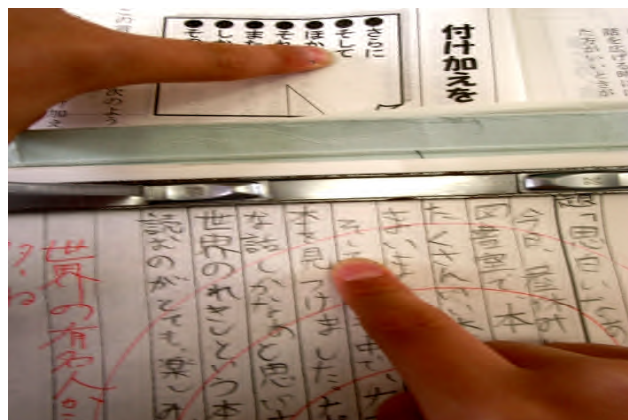


【朝のスピーチでの活用】

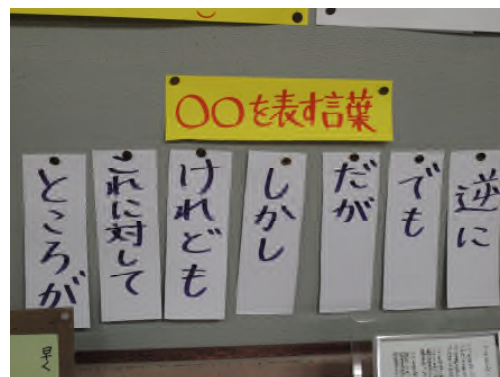
朝のスピーチの下書きを書かせる際、語彙集を手がかりにした。接続語を意識しながら文章を書かせることにより、文章構成が整理され、分かりやすい文になった。

また、日記も語彙集を活用させながら書かせた。使った言葉は語彙集にチェックを入れていくことで、全部の言葉を使ってみたいと意欲をもち、日記に取り組むようになった。教師が日記の中に蛍光ペン等でマークをつけていくなどの手だてをとることで、児童も接続語を使って文章を書くことが多くなってきた。

教室の中に「接続語コーナー」を設け、語彙集から抜粋して掲示した。日常的に接続語に触れさせることで、接続語への興味・関心を高めることができた。



【 日記での活用 】



【 掲示コーナー】

## 2 表現力の向上を把握するための評価についての研究

### (1) 作文の評価について

教師は幾つかの観点に基づいて作文を評価していくが、作文の評価は個人の感覚的要素も左右しやすく、数学のロジックのようなきっちりとした評価が難かしことも事実である。しかし、作文のテキストをいくつかの観点から数量的に分析し評価することが可能になれば、評価方法の共通の足がかりや作文指導の指針として大いに役立つと考えられる。

そこで、我々は、作文を評価するときの基本的な観点として「5W1H」、「接続語」、「たとえ・事例」、「わけ・根拠」、「考え・感想」、「ナンバリング」の6つの調査項目を挙げ、教師の評価と作文の中に書かれている各項目の出現回数との関係を調べることにした。

下表「相関係数」は、課題作文の中に書かれている調査項目の出現回数と、課題作文に対する教師の評価との相関関係を調べたものである。

#### 【「相関係数」】

	5 W 1 H	接 続 語	た と え ・ 事 例	わ け ・ 根 拠	考 え ・ 感 想	ナ ン バ リ ン グ	教 師 に よ る 評 価
5W1H	1	0.50	0.40	0.46	-0.02	0.19	0.34
接続語	0.50	1	0.34	0.29	0.20	0.06	0.35
たとえ・事例	0.40	0.34	1	0.13	0.25	0.28	0.44
わけ・根拠	0.46	0.29	0.13	1	-0.20	0.22	0.30
考え・感想	-0.02	0.20	0.25	-0.20	1	0.02	0.37
ナンバリング	0.19	0.06	0.28	0.22	0.02	1	0.30
教師による評価	0.34	0.35	0.44	0.30	0.37	0.30	1

ア 課題作文に対する教師の評価と課題作文の調査項目「5W1H」、「接続語」、「わけ・根拠」、「考え・感想」、「ナンバリング」との間には、それぞれ0.34、0.35、0.30、0.37、0.30の弱い正の相関関係が得られた。

イ 課題作文に対する教師の評価と課題作文の調査項目「たとえ・事例」との間には、0.44の正の中程度の相関関係が得られた。

ア、イより、我々が調査した課題作文の調査項目と教師による課題作文の評価との間には、それぞれ正の相関関係が認められる。よって、本調査項目を指針とした作文指導や教師の作文評価及び児童・生徒の作文の自己評価への利用は有意義であると考えられる。

しかし、本調査の結果から、課題作文の調査項目と教師による課題作文の評価との関係は、弱い正の相関関係であるため、更に調査すべき項目や分析手法が多く残されていることが考えられる。よって、本調査項目のみによる作文の数量的分析に基づく評価は、限定されたものであると考える。また、今回の作文調査では、すべての学年で取り組みやすいテーマとして「自己アピール文（私のよいところ）」を与えたが、テーマとの関係から作文中に調査項目「わけ・根拠」は出現しにくく、逆に調査項目「ナンバリング」は多くの児童・生徒が利用したため、両調査項目と教師の評価との相関関係が小さくなるなど、調査項目と課題作文のテーマとの係わりや分析方



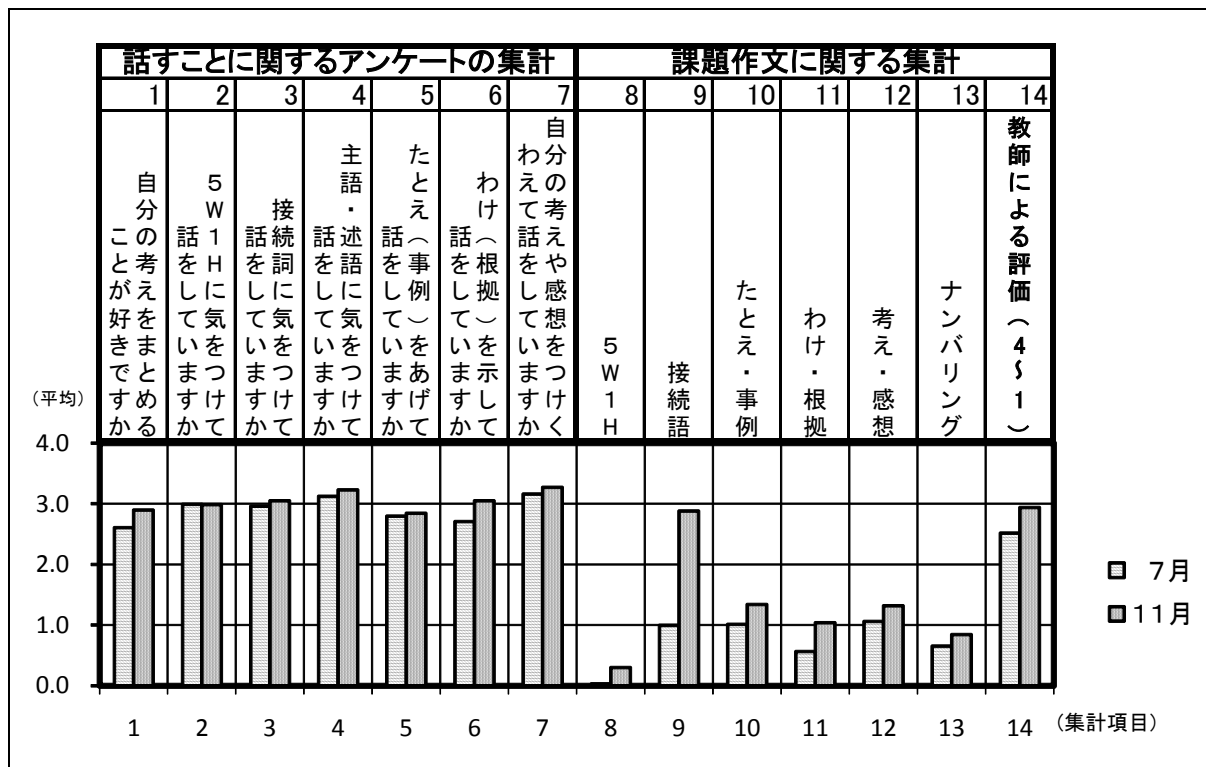
法の検討が必要である。

これらの課題解決の一つとして、今後、課題作文のテーマと調査項目との関係やすべての品詞や語彙の分析、更に文章構造の分析など、テキスト分析の手法等が必要であると考ええる。

(2) 児童・生徒の変容について

下表「7月と11月の話すことに関するアンケート及び課題作文の集計結果（全学年）」は、7月と11月に実施した話すことに関するアンケートの各項目の平均と課題作文内の各項目の平均出現回数並びに課題作文の教師の評価の平均を対比しやすく棒グラフに整理したものである。

【「7月と11月の話すことに関するアンケート及び課題作文の集計結果（小4年・6年、中1年）」】



ア 意識調査のアンケート結果・考察

- ・ 3学年ともにすべての項目において7月を上回るか、または同等の結果であった。
- ・ 6・7の項目（わけを示して話しているか・自分の考えや感想を付け加えて話しているか）においては、7月に比べて11月の方が児童・生徒の意欲が高まった結果となった。授業や日常指導においてポケット集を用いた指導を行ったことにより、児童・生徒が話す場面でも作文を書く場面同様にわけを示したり、自分の考えを付け加えたりするなどの意識が高まったものと思われる。

イ 作文に関する集計結果・考察

- ・ 7月に比べ11月の結果は、3学年とも上記以外において使用頻度が伸びている。
- ・ 特に接続語の使用頻度が伸びている。授業や日常指導の中でポケット集を用いて指導を行ったことによると思われる。
- ・ 教師による評価については、全学年とも評価が上がった。児童・生徒の作文がより論理的な作文へと変化したことの表れであると考えられる。
- ・ 5W1Hの項目については、テーマ作文の中で使用しづらいものであるため、使用頻度は伸びなかった。

## VIII 成果（○）と課題（●）

- 接続語に関するポケット集を作成して、小学校第3学年以上の全ての児童・生徒に配付することができた。ポケット集を作成したことで、授業での指導を充実させることができただけでなく、児童・生徒が進んで活用しようとする姿が見られるようになってきた。
- ポケット集を活用した授業研究を通して、文章の論理的構成に着目しながら文章を読み取ることを習得し、さらに、児童・生徒の文章表現においても論理的構成に注意しながら書かれた作文が見られるようになった。
- 指導者の評価と接続語や文章構成に注目した評価の比較によって、双方の評価にある関係性を明らかにすることができた。
- ポケット集を作成したが、活用の仕方を十分検討することができなかった。そのため、町内の先生方への情報発信が十分にできなかった。
- ポケット集の活用については、授業中の活用の仕方や日常指導での活用の仕方、家庭学習での活用の仕方等を学校職員や保護者に提案できなかった。
- 指導者の評価と接続語や文章構成に注目した評価の比較において、一部関係を明らかにできたが、その関係を生かした指導の工夫にはつながらなかった。

### 【参考文献】

小学校学習指導要領  
 中学校学習指導要領  
 小学校学習指導要領 解説 国語編  
 中学校学習指導要領 解説 国語編  
 小学校・中学校 教科書 (国語)

### 【研究同人】

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
教育委員会	所長	家高 清	高原小学校	教 諭	瀬戸山剛介
教育総務課	研究指導員	濱砂 敬三	広原小学校	教 諭	甲斐 裕之
教育総務課	課長	山崎 和行	狭野小学校	教 諭	瀬川 大輔
教育総務課	課長補佐	齊藤 和男	後川内小学校	教 諭	田上 和浩
教育総務課	係長	久保田光信	高原中学校	教 諭	今村 菜緒
			後川内中学校	教 頭	植木 秀芳